

「学習の前に 世界の子どもたちと協力できることを考えてみよう」 ～言語活動の充実に焦点をあてて～

公立中等教育学校教諭

1 はじめに

平成28年8月26日、中教審の教育課程部会において、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」（以下、「審議のまとめ」）が公表された。本稿では、この「審議のまとめ」をふまえた授業例を提案してみたい。

まず、「審議のまとめ」のポイントの一つは、これまでの「何を学ぶか」を土台とした教育課程の設計から、「何ができるようになるのか」、「どのように学ぶか」も土台として重視するという点であろう。とくに「どのように学ぶか」にかかわるアクティブ・ラーニング（以下、AL）に対する注目度は高い。しかし、文部科学省関係者が注意をうながしているように、ALは特定の授業の型を意味するものではなく、「主体的・対話的で深い学び」であるということに留意しなければならない。つまり、ALという点とすぐにペアワークやグループワークといった活動に注目しがちだが、生徒の思考の過程にこそ注目すべきである。私たちは生徒に対し「考えてみよう」と指示するが、ALを取り入れた授業では、この「考える」をより具体化する必要があるだろう。本稿では、「考える」をより具体化することに留意した授業例を提示したい。

2 写真資料や地図を活用することの利点

今回の授業例で扱うのは、『社会科 中学生の公民』（以下、教科書）第4部「私たちと国際社会」の導入部「学習の前に 世界の子どもたちと協力できることを考えてみよう」（図）である。

まず、具体的な授業例を示す前に、写真資料や地図を活用することの利点について述べてみたい。

（1）考える→想像する

写真資料は、時間および空間を切り取った断片情報である。時間的な意味での断片情報とは、写真資料によって切り取られたのは連続する時間の1コマであり、当然のことながらそのコマの前後が存在する。一方、空間的な意味での断片情報とは、写真資料はカメラによって切り取られた空間の一部であり、やはり切り取られた枠の外側には広い世界が広がっている。

このような特性をもつ写真資料を活用することの利点は、生徒の想像力をはたらかせることができる点にある。上述したように、写真資料は断片情報であるため、切り取られた瞬間の前後や切り取られたフレームの外に広がる世界を想像しやすい。想像力を豊かにすることは、これからの世界を生きぬく生徒にとって、きわめて重要となってくるはずであ

る。なぜなら、グローバル化が進展する世界では、自分のもつ価値観とは異なる価値観をもつ人々との協働が増えるはずであり、そのさい重要となるのが、異なる価値観の人々のものの見方や考え方を想像することだと考えるからである。想像するとは、言い換えれば異なる視点にたつということであり、それは多角的なものの見方や考え方を身につけることである。想像するとは、「考える」をより具体化したものの一つである。

(2) 考える→類推する、関係づける

地図は、さまざまな場面で活用されるが、「考える」という点に焦点をあてるならば、地図は類推することに適した素材である。類推とは、広辞苑によれば「類似点に基づき他の事をおしはかること。」とある。例えば、緯度、地形、臨海か内陸かなどの類似から、距離的にはなれている複数の地域の地理的条件などがある程度おしはかることができる。

さらに、今回教科書に示されているような統計情報が地図上に示されているような場合には、歴史的分野での学習内容などとも関係づけることもできる。類推すること、異なる情報を関係づけることも、「考える」ことの一つの具体化である。

3 具体的な授業例

(1) 資料からストーリーをつくる

上述したように、写真資料は生徒の想像力をはたらかせることのできる良い素材である。したがって、その特性を生かし、単に写真に写っているようすの背景を想像させるだけではなく、写真に写っている人物を主人公とする短いストーリーを考えさせたい(表1)。ストーリーを考えることで、写真の中の人物をよりリアルな存在として実感することができる。写真の中の人物が、よ

図 『社会科 中学生の公民』 p.164~165

表1 ストーリーをつくらせる授業例

	学習内容	教師の支援など
導入 10分	1 「やってみよう」① 教科書の6枚の写真と関連する地図から読み取れる情報をたくさんあげさせ、クラス全体で共有する。	・グループで話し合わせた結果を共有させたり、個々の生徒に挙手させたりすることも可。
展開 30分	2 ストーリーをつくる 生徒1人に1枚の写真を割りあて、写真の中の子どもを主人公とした1日のストーリーをつくらせる。 3 つくったストーリーを共有する 異なる写真でストーリーをつくった生徒でグループをつくり、ストーリーを発表し合うとともに、感想を述べ合う。	・導入時に共有した情報を根拠としたストーリーにするよう、注意をうながす。 ・1日と限定することで、ある程度の長さにおさえることができるとともに、想像もしやすくなる。
まとめ 10分	4 「やってみよう」② 同じ写真のストーリーをつくった生徒でグループをつくり、主人公の子どもと世界をより良くするためにできることを考える。	・各自が想像力をはたらかせてつくった多様なストーリーをもとにすることで、話し合い活動を活性化させることができる。

りリアルな存在となることで、「やってみよう」②の「世界をより良くしていくために、子どもたちといっしょにどのようなことをしていくべきか考えてみましょう」について、生徒はイメージしやすくなるを考える。

なお、社会科の授業においてストーリーをつくらせるさいに重要なことは、資料などから読み取れる根拠にもとづかせることである。今回の授業では、写真や地図から読み取れる情報を根拠として、想像力をはたらかせ、ストーリーをつくらせたい。このことにより、ストーリーが単なる妄想とはならず、よりリアルなものにすることができる。さらに、つくったストーリーを共有することにより、想像させることのおもしろさも実感させたい。友人の想像したストーリーからいろいろな気づきが得られるはずであり、そこから想像することのおもしろみ、大切さに気づかせたい。

(2) さまざまな発想法を活用する

写真資料や地図は、「考える」をより具体

化するための利点をもっている。一方で生徒は、ともすると「正解は何か」という発想におちいりがちである。さらに、われわれ教員も、今回のような「学習の前に」というような特設ページについては、学習内容（覚えるべき事項）にとぼしいという理由から、軽く扱ってしまったり、あるいは扱わなかったりということもある。

しかし、上述した「審議のまとめ」では、これまで重視されてきた「何を学ぶか」とともに、「何ができるようになるのか」、「どのように学ぶか」も同じように重視されている。

そこで、「どのように学ぶか」という部分に視点をあてたとき、総合的な学習の時間などでよく活用されている、さまざまな発想法を授業に積極的に取り入れたい。生徒の想像力を刺激しやすい写真資料、類推や関係づけを行いやすい地図などは、さまざまな発想法と組み合わせることで、より効果的な活動が可能となると考える。

表2 K J法とワールドカフェを組み合わせた授業例

	学習内容	教師の支援など
導入 10分	1 K J法 3名程度のグループで、写真と地図から連想されることを、色の違う付箋紙に書きだし、模造紙上に貼りだして、分類・整理する。	・連想したことを可能な限りたくさんあげることが、K J法のポイントである。
展開 30分	2 ワールドカフェ ①3名のグループのうち、1名を残し、ほかの2名はそれぞれ別のグループに移動する。 ②残留した1名は、ほかのグループから来た2名に、模造紙を参照しながらどのように分類し、整理したかを説明する。 ③ほかのグループのメンバーは説明に対して質問したり、自分たちのグループについて説明したりする。	・このとき、説明を聞いて気づいたことや質問したことなどを、K J法の模造紙にどんどん書きこませるようながす。 ・ワールドカフェは、①～③を一つのセッションとして15分程度で行い、2回実施する。
まとめ 10分	3 「やってみよう」①、② K J法を行ったグループにもどり、ワールドカフェでの気づきなどを報告し、共有する。さらに、模造紙をもとに「やってみよう」①、②を行わせる。	・K J法、ワールドカフェを行うことにより、視野を広げ、より柔軟に話し合い活動を行うことができる。

今回は比較的よく活用される発想法であるK J法に加え、ワールドカフェという方式を組み合わせた活動を紹介したい(表2)。

なお、授業の最後には、必ず活動に対するふりかえりも行わせたい。ALを導入するにあたって重要なのは、生徒に活動のふりかえりを行わせることにより、活動を客観視させることにある。活動に対するふりかえりを行わせることで、その有用性についての気づきを得られるならば、その後いろいろな場面で、これらの活動を生徒が活用できるようになると考える。

4 排除ではなく共生、協働を

昨今の国際情勢をみると、排除の論理が優勢であるように思える。確かに、排除し価値観の同じ仲間にいることは安心ではあるかもしれない。しかし、それで真の国際平和が達

成されるであろうか。異なる価値観をもつ人々が、多様性のなかにあって共生していく、協働していく姿こそ、真の国際平和には似つかわしい。そのためには、想像すること、自身の考えを表明すること、そして、異なる意見から新たな気づきが生まれることを、授業を通じて生徒に実感させたい。

アクティブな、生徒の思考が活性化する活動にこそ本来の学びがあり、そのために教師は、授業を設計するさい、どのような思考をともなった活動をさせたいのかを、明確に意識する必要があるだろう。今回の授業例が、そのための一助になれば幸いである。

なお、今回の授業は第4部「私たちと国際社会」の導入として実施したものではあるが、その後に学習する各単元に入るときに、今回つくったストーリーやK J法を行った模造紙などを再度活用し、授業に対する関心を高めたい。